

り捨てた風も吹き荒れていた。このような昭和の初年という時代は丁度、先に建築学会が建築家協会の衣を自ら脱ぎ捨て、新たに中條精一郎、高松政雄、長野宇平治らによって日本建築士会がその機関紙を発刊する時期に重なる。それはとりもなおさず、建築家という職掌の独立を宣言し、その社会的責任と義務の自覚を確認することを意味したと言ふべきであろう。やがて、長野宇平治はジュリアン・ガデーの『建築の諸要素と理論』の終章に納められた「ガデー典範」(Code Gaudet)即ち「建築士とその職責」の翻訳を、辰野金吾の子息辰野隆の協力を得て一冊の本にまとめ出版する。士会の機関紙『日本建築士』誌上に彼の抄訳が掲載され、それを契機に建築家の職責とは何かが論じられるようになり、厳しく商行為から自己を切り離したその職性がおそらく明確化されることになる。このことは中村建築家教育の発足と、決して無縁であるはずはない。

こうして建築家という職掌の社会に奉仕する自立性が解明されるこの時期、一学派として、一人中村順平のみによつて、ハマの一角にその教義が展開されるのである。孤塁を守る開拓者たる必死の構えが、中村自らに課せられていたといってよい。しかし忘れてならないのは、激動をはらんだ時代の一方において、いわゆる個性や人格を重視する理想主義が、更にまた、困苦を克服するに全力を傾倒し、豊かな創造に己の意志を貫徹する啓蒙主義が、大正という良き時代の残映として、日本の知識人のうちに息づいていたということである。煙洲が三無主義を貫いた自由主義、中村が詩と真実を追求した狂気の教育も、ともにこの時代、大正の余韻ただよう時代の背景あってこそ、その存在を確かめ得たに違いないのである。

3

大森駅を海岸とは反対の山手側に降りると、駅前通りは池上の方に向つて緩い下り坂になる。瓦屋根の古い家並みに混つて、『富士屋レストラン』や『資生堂パーラー』などの洒落た洋風構えの店舗が、山王の崖下に片側一列に張りついた形で、ここだけが銀座の地つづきらしく栄えていた。しかしこんな家並もやがて途絶える坂下から、山手の

高台側に曲がる道を入ると、大きくカーブを描く畠さえ暗いかなりの急坂にさしかかる。『暗闇坂』とはよくいつたもので、台地を切り拓いたせいか、両側から高い石垣が迫り、その上にうかがえる住宅地の庭樹が、被さつてトンネルのような景色の、昔の東京の坂道にはよく見かける、人の歩くには情緒細やかな風情があった。この辺り山王から新井宿にかけて、更に馬込の文士村辺りまで、大震災後急いで開発された山手住宅地は、処々に神社や寺も点在する閑静さで、東京のベッドタウンといった趣である。東京駅から桜木町駅を結ぶ国鉄桜木町線の電車は、これら山手から海岸沿いの住人が乗り降りする大森駅のプラットホームを、朝昼夜と時を仕分けて走っていた。わけても昼近く水色の帯を巻いた二等車が停ると、山手の有閑奥様族や着飾った令嬢達に混つて、文士や芸術家のそれと知れる個性が、このプラットホームを、帝劇の新派舞台が幕を開けたような、大正という時代の様式に完結するのである。

一九二六年(T15)、二年生の夏休みになった或朝早く、私は中村から急ぐ仕事の手伝いを求められ、胸膨らませて、この暗闇坂を上つていったのである。坂を上りつめると、左側に『OHMORI HOTEL PENSION』と横文字の看板が見られる。建物をうかがい得ないほどに繁った樹の小枝が覆う小道を左に半廻りすると、ボーチ先の階段へと導かれる。ハーフティンバーのバンガロー建てだが、仰ぎ見れば玄関の切妻が葉陰に隠れて、薦が二階の外壁を覆い尽している。異人屋敷にふさわしいたたずまいである。このホテル客はほとんどが外国人である。短期滞在の外国航路の乗員らしい客もよく見かける。フロントにいつも精悍で健康そうな緒ら顔をのぞかせているマネージャー猪原は、多国籍の客をバンチの効いただみ声で自在にさばく。ここロビー界隈は日本ではない、一切の日本の馴れ合い的理解を距ていた。それが一層、中村の居心地を良くし、猪原とは結構馬が合う仕掛けとなっていた。

フロントの前を二階に登る階段手前の左側は、かなり広いロビーが一段床を下げて、正面の庭に開口する窓から、緑の光が暗くよどんだ室内に滲んでいる。階段を登つて、教えられたままに中村の部屋の扉をノックして入つた部屋は、窓越しに裏庭の緑に映えて、夏というのに冷やしと涼気が沈む気配。中村は太肉の身体に、江戸前の浴衣を角帯できりりと締めて、健康そうな二の腕が、僅かにたくし上げた袖から青磁のように艶やかである。

アトエリとはいっても、ホテルの一室をベッドと仕事場とに、カーテンで仕切つてある十五畳ほどの広さしかな

い。製図板は二台がせいぜいで、天井に迫るほどのミロのヴィーナス像の、石膏の白肌もあらわに格好のよい乳房が、孤独のすまいを支配している。ベッドの頭近くに文机が一つ、『建築学』の執筆が進行中なのか、机の周りは雑然と仮縫の本も混る原書が積み重ねられて足の踏み場もない。朝早くかたのか、中庭に面した小窓に寄せた小卓に朝食が運ばれている。オートミール、トースト、ハムエッグに果実、コーヒーといった質素ながら巴里の生活がそのままにある風情で、中村にとて届託もないこの気易さが、永く独り身を支える住居となりつづくのである。

大森駅から二等車で桜木町駅に降りる中村は、弘明寺行の市電に乗って登校してくる。太身のステッキを右手に、左手には黒皮のカバン、その中身は建築学講座の草稿である。時には大型のカルトンが身辺から離れることなく、昼近い校庭を真一文字に横切って校舎に向う。時に校庭に展開される軍事教練の行進がある。大股に校庭をよぎる教授の方に、完全式装の中隊行進が直角に突込んでくる。この時、田中少佐の甲高い声で「回れ右、前へ……進め」の号令が砂塵の中に響き渡る。何としても、その場の風景には誠にそぐわない、おかしみに耐えた異様な親しみの喝采が、そこにはあった。

中村は上衣を脱いで、学生と同じようにブルースを着る。時には着る間もどかしいのか、いきなりワイシャツの袖をまくり上げ、たくましい肌白の両腕を、それは天王寺中学時代に野球で鍛えた逞しさが残っていたが、左手にT定規、右手には木炭をつかんで製図板に向かって身構える。スリーキャップルの両切煙草が、いつも下唇の上に引っかかっている。火がついでないこともあるが、時によつて灰が長く垂れ下がり、図面の上に粉と散つても、木炭をもつ手の走りはそれを気にするよしもない。その一閃の走るところ、たちまちにして三次元の映像が現われ、量塊が構築されていく。学生達はその一瞬、百の説法を越えて手の思考する秘技に酔わされる。ときには製図板の周りには三人、五人と輪を作る。そこがそのまま修練の道場となり、聞き逃すことが許されない珠玉の言葉が心魂に伝わる。その間も手の思考は、練りゴムをつかんだ一刷けに、空間の軸線が走り抜ける。「どうだ!!」と自らの快哉の声に、一同の視線が板上の構像に釘付けされる。オールバックの豊かな長髪から、ヘアティックの香りを残して、次の学生の

製図板に移っている。

一日の中にこのようにして中村が見て回るのは五人、時には三人と、夕食の近づく頃になつても、大製図教室の一隅に、熱氣のこもつた講義が続く。教授が座をおろす製図机には一つの条件がある。製図板にとりついている学生なら、必ずいつか教授を迎えるとは限らない。やつていてるか、やつていなか、これは明白である。図面が汚されていて、取り組んでいるか、いかが条件の岐れ目となる。当然その汚れたが問題であるが、そればかりではない。鉛筆の削り方が悪い、ただそれだけのこと、鉛筆は板上に叩きつけられ、中村を再び迎える機会がくるまでに、旬日を要することになる。まずい、趣味の悪い、無様な図面に対しても必ず制裁が待つてゐる。フランス語で*grossier*（悪趣味）の汚名を着せられただけですまさるものではない。目をそむけてあたかも汚物に触れて悪感が走る仕草よろしく、拒否反応もあらわに遠ざかになってしまう。こうなると旬日どころではなくなる。かくて製図室は芸道修羅の道場であることを、いやというほどに思い知らされるのである。

一九二七年(S2)春、三期生が入学していく。午前中の基礎教課をすまし、新しいブルースを着た新参の学生達が昼食を終えたのか、三々五々賑やかな雜音をみなぎらせてアトリエに集まつてくる、青春の熱気がコッショーンの気風もまだ身につけ得ずに、一、二期生を圧してはばかりところがない。咲笑がはじければ冷罵も飛ぶ。私語の片隅からシャンソンも流れてくる。アトリエの片隅に一期生の石塚喜一郎を囲む集りは、江戸文学論が華を咲かせているらしく、時折りの忍び笑いはいつもの無邪気な猥談が始まっているからだろう。自由な和気に三期生が溶け込むのも遠くはないアトリエの午後は、こうしてまた夜を迎え、朝に続く。彼等はまだここが修験の道場であることを知らぬるにみえる。

この期に至つて、一、二、三期生合同のアトリエは、開創以来始めて充実した活力をみなぎらしていた。新参のコッショーンはいよいよこれから教授の厳しい鞭を浴びるのである。

ひと教示終つて昼もとうに過ぎた頃、製図板近くの机が教授の食卓に早変わりする。近くの誰かが昼食の注文に校

門前の長寿庵か宮川亭に走る。大抵それは上天井である。こうした日課は特別の予定のない限り乱されたことを知らない。建築学講座のある日、時によつて講義の最中に注文の昼食が届くことがあると、出前的小僧は盆をさげたまま崇高なる抽象に戸惑いして茫然耳を傾けさせられる。えび天の衣は延びきつて情ない仕儀となる。こうした招かれる聴衆は、お茶運びの小使さん、あるいは職員、まれには鈴木校長であり、中でも鈴木は童顔をほころばせて臨場の快に酔うのである。

ところがそんなある日、鈴木は校長室に血相かえた中村の闖入に遇う。当時校内新聞「高工時報」が月一回発行され、各種のゴシップ記事もあつたらしく、その中に順平をもじつて「へへ」と書かれているのを知らされるや、「こんな学校にとどまる義務は持たない」と校長に迫る。芸術家らしい一本氣と余りの無邪気さに、反論の言葉を失つて困惑する鈴木は、この時自若として騒がず、中国の文学者林語堂の『生活の発見』上下二冊を中村に手渡して、これを読め、わしの答えはすべて、この本の中に書いてあるといつて難題から逃れる。しかしこの本を読んで悟道に達するよりも、中村にあつては芸道を極めなければならない使命のみがすべてであつた。それだから、校長も教授も以来林語堂には関係なく、対立の土俵の上で思いきま四つに組んで、しかもその取組みは、傍の目にも結構楽しんでいるとしか思えないのである。

この年の五月になつて私達一期生は奈良旅行を企画した。中村塾の大泉博一郎に一期生四人と、選科に籍をおいた池田英夫（大正博以来知己を得た池田稔の長男）を加えた六名が、中村に率いられての見学旅行となつた。

第一日目は待望の法隆寺見学である。大泉の手配よろしく坊さんに頼んで梯子を貸して貰い、金堂の軒庇に立てかけて屋根に登り、雲型肘木の巨大な量塊にかじりつき、模造紙を當てて実測した。果ては勾欄から登り竜を仰ぎ見る勝手な観賞に時を過す。古都の仏寺は観光の対象からは遠く距てられ、学究者のみに開放された文化財であつた。私にとつてこの奈良の旅は、後年幾度となく訪れた古都探索へのこの上もない道しるべとなつた。そして言うまでもなく、中村にとつては、フランスから帰つて以来、久し振りに、日本を一層心近く経験した旅であつたに違ひあるまい。

中村がその日の教示を終えて腰を上げる頃は、冬は陽が大岡の山間の彼方に暮れ落ちて、暗い校庭を校門へと帰り

を急ぐ。そんな時よく私は供をして市電に乗り、中村と馬車道で下車、誘われて行く先はきまつて伊勢佐木町の中華料理店であった。

博雅亭の斜め向いの小じんまりしたこの店では、中村は常連の御得意なのか、支那人の主人が自ら笑顔を見せて出迎えた。ホテルに帰つても、ヴィーナスの石膏像よりほかは、話し相手とてない独り身である。学生相手にくつろぎの時を共にするのも、あるいは気怠い安息なのかも知れず、そんな席でどんな話が交わされたのか、思い出せもしないが、未知の世界を垣間見たい私の心弾ませる思いは抽象を離れた現前に彷徨うしかなく、おそらく熱っぽい愛に充ちた教示が迸り出たに違ひない。

光まぶしい伊勢佐木町の街に出ると、中村と並んで暗い吉田橋を渡る。上げ潮なのか、磯臭い香りが橋の下から吹き上げてくる。私は夜の挨拶をすませて、海近い根岸の叔父の家へ間門行の市電を待つのである。辺りの店屋はすでに大戸を閉めて人影もない。独り中村は、馬車道から桜木町駅へと、ステッキの音を暗い歩道に響かせて、孤独の夜に消えていくのであつた。

私の生い立ちを顧みれば、外地での生活が永かつたため、コスモポリタン的な世界に在つたと言える。義理と人情の柵^{しばら}や土下座、裸身に鉢巻の世界が、日本の土俗風土の底辺にうかがえることにさえ、嫌悪に似た嘔吐反応をどうしようもない。外地に在つて育ち、この国を未知の国として対した私に、そんな底辺をふつ切つて、日本の芸の美と、真実に開眼させたのは、建築学の講義であり、建築図画による日本建築の古典への觀照であつた。未開の原野にも等しい魂の中に、それらは驚異と新鮮と血脉に近い物象として投影され、拡大され、そして消化されていった。ここに肌から迫るものは、日本の美への單なる詠嘆であるはずはない。ゴチックも、ギリシャ、ローマも、それら古典が同価値同次元で迫つてくる。真正なるもの、美しい比例を持つもの、善なる架構に支えられたもの、それらの例証に對面させられる時、眞実と虚偽、美と醜、善と惡との選択をいられる。バルテノンと神明造りが、三月堂とノートルダムが、その総括と解析とを通して現前の対象となつて、素材も、架構も、風土も、さらには時代をも逸脱し

て、人間のモラル、即ち永劫なる尺度によつてはかられるのを知らされる。中村のこの教示は、愛をこめて、この上もなく教え子の生涯を豊饒をもつて抱き止めてくれるのであつた。それだけに、家庭も持たずひたすら孤單を守つて教え子の生長を見守る中村の姿に、ブルースを纏う一人の導師を重ね見ないわけにはいかない。

中村塾

一九一〇年四月、中村順平が名古屋から笈きゅうを負つて上京して降り立った駅は、鳥森停車場（現新橋駅）であつた。この時、丸の内に見る中央停車場は、鉄骨の巨大な骨組がようやく組み上げられたばかりで、赤煉瓦街の一丁ロンドンより北の方、神田寄りの地域は、街区も未だ整わず、停車場周辺の工事場の辺り一面は、葦わの草原や水たまりが处处に残されたまま、勿論丸ビルも郵船ビルも海上ビルもない、見渡す限りの空地が、宮城の石垣まで堀を隔てて展がつていた。

あれから二十年近い歳月が流れていた。昭和三年（一九二八）の春浅いこの時期、ここ丸の内一帯は東京駅を中心とした一大ビジネスセンターが、大震災後の復興もようやく一段落を告げて、都市の中核たる建築的環境を造成し、日本経済を主導する活力をみなぎらせていた。様々な様式が混在するその街並みは、千代田城の傍らで雑種の植民地文化を匂わせてはいたが、現在の丸の内に見る無性格な景色とは違い、人間臭い秩序とロマンに満ちた気配が街の活力に機能していたのである。中村がかつて古巣とした曾禰・中條事務所も、時代の波に乗つて旧式の七号館が手狭になり、新築成った仲通り街のフラットに移り、新時代の要請に応えるための当時最も充実した建築設計事務所組織を整えつつあった。いま私は、丸の内のタイム・カプセルの扉を押して、中村の姿を追おうとするのである。